

高山羽根子『首里の馬』におけるモノと人のつながり

西田谷 洋

一 はじめに

高山羽根子『首里の馬』（新潮二〇二〇・七、『新潮二〇二〇・三、『文藝春秋』二〇二〇・九）は、沖繩及島嶼資料館の資料整理を手伝い、世界各地に遠隔クイズを出題する仕事をしていた未名子が宮古馬と出会い、資料館閉鎖後に記録データを遠隔拡散させ、この場を保存すべく馬と眼鏡にカメラをつけて撮影するという物語である。

小川公代氏は高山の他の作品群と関連づけ、『首里の馬』を「エイリアン」と「ネイティブ」を和解させる物語^①・「弱肉強食といのちについての物語」・「真偽のあわいを肯定する物語」と整理し、「学校では落ちこぼれ、学歴競争から取り残されていた未名子は、ネオリベラリズム的な競争社会から取り残されてしまふような弱者の代表格^②」と捉える。人の傷つきやすさ、ヴァルネラビリティは、地形や家並み、生き物、資料の壊れやすさ、移ろいやすさも類似する。こうした壊れやすさへのまなざしは記録・保存することの意味と結びつく。

記録は記録するものと記録されるものとの対応に関わり、意味するものと意味されるもの、名づけるものと名づけられるものとの対応にもスライドしうる。榎木野衣氏も、「未名子がこの作業にある種の充実感を持って取り組むことができたのは、まさしくそれが際限のない繰り返し、つまりルーティンであり、未だ名が定まらない未名子の存在のあり方そのものに、ほどよく合致して」おり、「たったひとつしかない正解としての名を与える逆のシステム^③」であるクイズと対比する。

新城郁夫氏の写真撮影・保存を「奪われつつある「今」を記録する抵抗をして、生きていることそして住んでいることそのものが生の条件を形づくり、生き延びの時間を創出することへの切迫した賭け^④」とする把握に順さん・未名子の資料保存・記録をなぞらえた村上克尚氏は、「名づけられてからでは失われてしまふざわめき^⑤」として事実を捉え、「記録の別の特性、すなわち時間を隔てた再読、まったく異なる文脈と繋がる可能性に賭けた行為^⑥」として評価し、「為政者によって記録の隠蔽や改竄が平然と行なわれ、あったことがなかったことにされる社会に生きる私たちにとって、記録による抵抗という主題はどこまでもアクチュアル^⑦」として、「記録たちを、掘り出し、

再読し、自分たちのいまと接続することを読者に呼びかけている」と捉える。

記録すべき対象がうつろいやすく壊れやすいものであること、記録し保存するという行為はそれを行う行為者を必須とする。そして、その記録がどこかにつながるということからすれば、行為者によってつながるネットワークが想定されていることになるだろう。

そこで、第二節では名づけとシステムの関係をたどり、第三節では行為者がもたらすつながりとしての社会を捉え、第四節では亡霊的な存在のつながりももたらす体制のゆらぎを、第五節では変化の中にある資料・データの保存の限界を考察する。

二 名づけとシステム

主人公の名前は未名子として、名前に対して対象・現象が先行することを意味するが、それは名前・意味と対象との関連付け・対応のあり方を喚起する。物語中では名前・標識と対象・現象・存在との関連を示すモチーフが反復・変奏される。

資料館でのインデックスカードは資料に対応しそれを指示する。未名子は順が「手作業で作ったインデックスのためのカードを、もう一度、その作業の軌跡をたどり直すように、必要であればカードの補修、補強をし、ときには新たに書き写し、原本と一緒に元の場所に保管」し、スマホでカードと資料を交互に撮影する。

未名子が撮影する資料館の画像データ、そしてそれを記録したSDカード、さらには未名子が外部送信したデータ群は、資料館の資料に対応しそれを指示する。そして伝承は地形・建物などの現物から出来事・行為などの文化・事件を対応し指示する。

その点で対応・指示する言葉・画像・記録とされる対象とはフレームなどの媒介を必要とする。いいかえれば、フレームがないと対象は理解できない。ただし、それは名前・意味づけの不在を意味するのではない。

未名子がクイズの仕事をしている仕事場は、事務机と機材が使われた形跡もなく、普通にあるはずのものがなく、人が働いているような場所とは違う印象がある。それは、ゲーム画面の背景としてCGで再現したり、人間をしらない地球外生命体を作ったオフィスとされるような非人間的な空間である。また、未名子が問読みを仕事にしている遠隔クイズは問題と解答（正解）が一義的に対応する。その点で閉じた客観的なシステムである。

しかし、未名子は、クイズと「そのあとの雑談の中で自分の心の中に引っかけた本や映画を帰ってから調べ、観たり読んだりするほうがずっと心が豊かになるような気」がし、「それは生活のあらゆる場所にはんのわずかずつではあるけれどしみこんでい」くと感じるように、そうした閉じた客観的な一意対応関係とは異なるものに価値をおく。

三 モノとつながり

一方、未名子は、資料館でインデックスの整理をし続ける。

資料館の作業に終わりが無いのは、現実自体に終わりが無いのと同じようなものだった。インデックスの整理は、補修が済むと次のステップに進む。ひとつの約束ごとでライオン上に並んでいるものを一度ほどいて、また別の約束ごとでつなぎなおすということを繰り返す。さまざま要素でつなぎ変えることを続けると、情報同士は有機的に関連していき、切り離されたものがまた別の項目と紐づけられる。

しかし、これは意味するものと意味されるものとの対応・指示なのだろうか。ここでは資料・要素の補修は約束事の関係を解体し別の約束事で関係づける行為を伴うように、主体的に有機的なネットワークが生成されている。そもそも資料を保存し、記録することは、必ずしも真実にとどりつけないとは限らないが、少なくとも真実へと向かうベクトルを作り出す主体の行為を意味する。

また、資料館には「あんなにただいだだけだった順さんがいないだけで、資料が全部黙りこんでしまっているみたいだった」と順さんの物語が必要とされる。資料は人と結びつけられている。すなわち、対象に関わる人の姿勢である。言い換えれば

資料も順がいないと変わる。

「身の回りにいる少数の人間」を「大切な人だと思」ついで未名子が、やがて「大きな感情のつながりのない人でも、ただ大切なのだ」と「あらためて思」うように、つながることからやがてそれ以外の人にも大切なのだと自覚するようになる。

当初嫌悪感をもっていたヒコキに対しては未名子はつながっていく。「しばらく歩いては降り、横を歩いてはよじ登り、といったふうにして、未名子とヒコキはその境目を曖昧なものにしていった」という表現は関わるることによって両者のつながりを強くしていくことでもある。やがてうまく動けるようになる。「未名子は、自分とヒコキがひとかたまりの生き物になつて、お互いの能力が拡張していくみたいな気持ちにな」るように、双方の能力の拡張とは互いに働きかけることでもある。人やモノは、あらかじめ確定した指示できる存在ではなく、それをを認知することではじめて存在しうる遂行的存在とすれば、社会は行為者が行為することで、それが影響を及ぼすつながりの動的なネットワークと捉えられよう。人間が世界の様々なたつなかりを作り出す行為者なら、モノも同じようにつながりをつくる行為体であり、人やモノがつながることでは社会はつねに動的に形成される不定形なものとなる。

未名子は、「できる限り自分で働いて、ほとんどひとりだけで勉強しているつもりだけど、人つてもともと、手分けして働いたり、勉強したりしていて、誰にも頼らず、ひとりずつで生きて、進化している訳じゃない」とつながりの中に人があることを認めている。

ところで、この立場からすればクイズも別様に捉えられる。なぜなら、クイズの回答は、回答者自身の人生の反映であり、「人生に一見もう必要がないと打ち捨てられていた、なんならもう二度と思い出したくも考えているような、脳の端にあつた経験が意味を持つ」。また、「孤独な業務従事者への定期的な通信による精神的ケアと知性の共有」とカンベ主任が定義するように、簡単な雑談がやりとりの中に含まれ、問読者と解答者の人生が関わる。クイズに付随するやりとりでの言葉の断片をつなぎ合わせ、状況を想像しながら話を聞くのは楽しく、クイズは興味のあることや生きてきた経験に追加しうる感情の動きがあり、そこに未名子や回答者という行為者の関与によってつながりが生まれる。

いったん整理しよう。資料の確認・再記録化はルーティン化されているが標識と対象とは一義的対応ではなく関連付けの仕方によって新たなつながりができるように固定化されていず、ゆらぎうる。回答者・問読者はいずれも個人的な悩みや苦しみ、あるいは社会的な孤独の中にあり、表面上・主目的のやりとりとは別の豊かな内面ややりとりが育まれる。

一方、未名子は「家と仕事と、資料館との往復ですつと毎日を過ごし」、「仕事を辞めても、資料館がなくなってもその閉塞感に終わりが訪れることはなさそうだった」が、「実際は未名子が望めばこうやって馬に乗って走ることも選べる」。閉塞感から離れた生き方、つながりを変えた生き方もできる。

このように捉えたとき、『首里の馬』の特徴は三点に整理できよう。

一つは、モノを重視する思考である。順さんの資料館は資料・標本を収集・記録し、未名子も改めて再記録化する。有用であるか否かではなく、その場の営みに関わり存在を示すものとしてモノが存在する。

未名子が電気屋から廃棄されたカセットテープブレイヤーを盗む行為もそれにかかわろう。廃棄物とすれば不要品であるが、しかしそれでも盗みではある。しかし、それは資料館にあるような人々の生を示すものだったからである。記録データがプライバシーに関わるかもしれないことには罪悪感を持つ。

もう一つは、既存のフレイムを用いて人々や現象を理解するのではなく、具体的な現象それ自体を見つめる姿勢である。双子台風の間にヒコキが最初に庭に出現したときも未名子はフレイムによって馬と即座に認識するのではなく、「大きな生き物」と捉え、時間を掛けて少しずつ認識を得ていく。

肉食なのか草食なのか、狂暴なのか、人に飼われているものなのか。自分の観察した結果にさえ自信が持てなかった。しばらく未名子はその生き物のそばに立つて、眺めていた。注意深く観察し、想像する。

未名子はフレイムが不十分なので観察しても分からないとも言えるが、一方で対象を丁寧に見えようとしている。そして、資料館が無くなる時と解つたときから未名子は「ずつと、自分の視界に入るこの島のすべてを記録していききたい、と強く考える。」⁽⁵⁾

三つめは、それがいかに複合しているのかを解き明かそうとする姿勢である。たとえば、ネットでの注文すらも「自分や、順さんや、資料館にあるすべてのものや、ほかのいろいろな自分のまわりのできごと、優れた解答者たちとその助言、大きな招かれざる珍客などが複雑に混ざりあい、組みあわされて注文に至り、届いた、偶然の贈り物」と捉えられる。

現象を複数の視点から記録する姿勢もそこからのバリエーションとなるだろう。未名子は自らのいる場を撮影することで世界の内部観測的な記録を残していこうとする。未名子のかけた眼鏡のカメラと馬の首にセットしたカメラは撮影しているものは不統一であり、特に馬の視界は未名子の意思とは異なる可能性が生じる。それは偶然的な動作による視界のゆらぎであるが、行為者の関与を示している。

四 七霊のゆらぎ

日本はかつて世界有数の経済大国であり、軍事活動において前哨地として沖縄の米軍基地が世界の大国から注目を集めていたが、日本の没落によって「今となつては日本語での会話が世界の電波に乗ってなされていたとしても、あまり気に留められない」だろうと未名子は考える。没落しているがゆえに打倒・競争する価値が失われ、世界からも関心が失われている。

資産も軍事力もないヴァンダの国は、「基礎的な人格教育にも力を入れ」、「教育が効果を発揮するのはちょっと時間がかか

るが「息の長い努力によ」つて「国自体を強くする大事な力になり」が「がんばったぶんだけ豊かな知識と物理的な環境が整えられ」た。こうした教育による人材育成にもとづく国家の繁栄は、「ニホンとはちがつ」た展開であり、非教育立国による衰退と、努力も報われない国・日本が示唆される。

さて、未名子が資料館で働くのはそこが「ほとんどの人から公共の知識だと認められていない、ひっそりとした情報の置き場所だから」であり、「補助金での正式な公的施設であれば長いこと続けられない」のように、公的で表の世界から認められた場所では働けず、そこは未名子にとって「逃げ込んだきた」場所でもある。

順さんは途さんからみると、「学者なのにやたらと声が大きくて、ずうつとあちこちをうろろろして、いつもなにかに腹を立てていて、世の中のいろんな細かいことに悲しんだり、絶えず文句をいっている」た。順さんは「弱い人の、かすかな不安について怒」り、諸外国の平和運動家たちの「影響を受け」つつも「独自の方法でなにか人々の生きる在りかたみたいなのを模索し」、「自給自足と、宗教とは距離を置いた思想の場」としての「思想的なコミュニケーション」を作り、「なにかを学び続けること、知識を蓄えることをこそ信じ」、「社会にいるあらゆる人を、自分の思う理想によって傷つけ」ないようしてきた。

このように資料館の創設者である弱者によりそう順さんは、不正義への怒りをもっていた。しかし、暴力に訴えるわけではなく、彼女はただ学び続け傷つけることはない。しかし、その存在は現在の体制に対するカウンターとして反体制的に孤立

し、「戦後の亡霊」としてこちらに働きかけるかに思われてしまふ。

しかし、(オウム真理教の)テロ事件以後は、「みんなが知らないところで、みんなの知らない組織を作っていること、それ自身が政治的な意図の大小にかかわらず罪と認定されるようになってしま」い、順さんは孤立してしまふ。

途さんはクイズショーの参加者も順さんも「知識を力に変えよう」としていたのは同じ」というように、同じものが異なつて捉えられることに疑問を持つ。「自分たちが結社なるものに参加したりしない、ということ、自発的に参加している人の思想や心情の自由を縛ることの境目、怖がられて生きることで自分の思うことを貫く意味、とか、ずいぶん考えることが増えた」というが、それは娘として母の老化・死に接してきたからでもあるだろう。しかし、実際に危害を加えているわけではなく、多様性を認めない均質的な感性の人々にはその存在が受け入れられないのである。

また、未名子はもともと「大きく明瞭なところこそが価値があつて優れている、と信じて疑われない人間」が苦手であり、警官に大声に「自分の存在を答められ、糾弾されているように聞こえて」思考が「一瞬でこわばつてしまふ。未名子は、公的に流通するマジョリテイの言葉を暴力として感じてしまふ。

そして、クイズスタジオの維持・運営に「穏やかに」「誠実にいいねいに対応してくれていた」電器店主はスタジオオや未名子に対し「ほんとうのところはずつと、とんでもなく薄気味悪いもののように思」い「本当はもう行きたくない」と苦情を言

う。こうした反応は組織を公的に代表する男性と地方の私的な個人である女性に対する対応の違いと共に、自分たちとは異なる他者性に対しての不寛容を示している。

未名子や順さんのような人間が「世の中のどこかになにかの知識をためたり、それらを整理しているということ」を、多くの人はどういうわけかひどく気味悪く思う」ように、世間は収集・知的活動に対し恐怖・嫌悪を抱く。なあなあの大勢・体制を維持するかもしれないが相対化するかもしれない知的活動の可能性を否定する点で、それは反知性主義と言えよう。資料館が「多くの住人にとつて魔女の館みたいに考えられているのかもしれない」と気づいた未名子は「理不尽」を「悔し」く思い、順が「ああいう生きかたをしているだけで、生きづらくなつてしまふなら、それは世の中のほうがちよつとおかしいんじゃないか」資料館や順さんが「世の中に具体的にどんな迷惑をかけたんだろう」とも思う。ここでは、多様性や知性に対する差別への嫌悪・抗議がある。

五 痕跡と変化

一方でそうした差別・排除を続ける体制あるいは基盤としての大地もまた不変であることはなかった。「この地域は、先祖代々、ずうつと長いこと絶えることなく続いている家というのがほぼな」く、城や建物群は「焼け残つた細切れな記録に、生き残つた人々のおぼろげな記憶を交えて作られた」ものであ

り、歴史も「現在までとぎれとぎれの歯抜け」である一方、地名は「なぜか王朝時代の昔から変わらず、ときにローマ字や漢字で表記されて歪みながらも音の印象は残したまま、何層にもほかの意味が塗り重ねられて、なんとなくなかつての面影を残しながら今に至っていた」と語られる。

現在の地形・家並みはかつての元の地形・家並みを記憶や想像力をふまえて復元・変形したものであり、地名は変化こそしないが、別の意味を重ねられ、それでもインデックスとして機能している。痕跡はそこにあるがそこにはないものを換喩的に指し示すが、対象にどこまでたどりついているのだろうか。

資料館の資料・記録は時代や記憶によっても記憶によっても変化する。

記憶の聞き書きや人の主張は収集する時代によっても要素が変わり続ける。時間によって変化していくうえ、その記憶の信頼度は絶えず揺らぎ続けるとても不安定なものだった。

どんなに補修をしたって、物体は放っておくだけで劣化していつて、中の情報が減っていくものだった。情報を「現在」とした時点で、それがもう現在でないのと同様に、資料館にある紙や布、文字のすべてのものの上を、無限の数の『現在』が通過している。

文化だけでなく、河も山も海岸線も、いろんなものは絶えず変化していく。

文化にしろ自然にしろ安定することはなく絶えず変化している。それは正しく復元・対応させようとする限りで真実であり、一方で定かではない限りで偽りでもありうる、真偽のあわいのなかにある。またそれは元々の意味に他の意味が重なっていくものでもある。物体は劣化し、非物体的な伝承も偽りを含みうる。

台風は、「強い風と低気圧で、人の内側と外側を同時にひどく揺さぶ」り「人の感情に直接働きかけてざわめかせる」のに対し、爆弾（やそれを用いた戦争）は「作った人の悪意や、あるいはそれを持ちえた人のざわざわした感情によって悲劇を起こす」。自然災害も戦災も、災厄によって「あまりにも様子が変わってしまったその風景を取り戻すには、どんな些細な手掛かりでも必要」な点で共通し、困難な記憶からの復元のための痕跡・トリガーの必要が示唆される。しかし、「記録していた情報も吹き飛ばされてしまうこともあるし、そもそも記録していないこともあるし」、「なんとなく以前の、ノスタルジーの補正がかかった記憶を見よう見まねで元の状態に似せながら、文化を曖昧につきはぎして」しまうように現在からのバイアスが関与し、破壊は復元が困難であり元に戻せない。また、「僕は、長い長い殺し合いで、進化した一番あたらしい人間だ。今生きているのは、人や動物を殺したから。僕は殺したほう」というギパノの述懐は、私たちの生が戦争と共に、あるいはその後にあることを意味する。私たちの生はそうした災厄の後の生なのである。

宮古馬を使った琉球競馬の消滅には大日本帝国の政策が影響

している。戦争用に改良された馬は戦争に徴用され、残った馬は沖繩戦で失われた。さらに、単一栽培は飢饉に弱く馬を飼育する余裕も失われ、豚コレラの発生によって動物を扱うことに制限がかけられた。

茶色のヒコキと同名のかつての名馬は白色である。意図せざる継承であるが継承には変形がつきまとう。

対象が変化するということは対象の近くもまた変化しうることになる。「できる限りの全部の情報、いつか全世界の真実と接続するように」自分の持つ情報を「消すことなく残す」とを未名子は考える。遠くに保存することは変化にまきこまれないという点では再読可能性を保つことである。

未名子が貯めて保存したデータはすべて、宇宙空間と戦争のど真ん中にある危険地帯のシエルター、南極の深海、そうして自分のリュックに入ったぎつしりのマイクロSDカードにカーボンコピーとして入っていて、いつだれが読んでもいい、鍵のないオープンなものにしてある。ただ、その場所はすべて、地球のとても深いレイヤーに混ぜ込まれていた。誰もが希望すれば容易にアクセスは可能なら、でも、まちがえてやって来るような人はまず訪れない場所。

こうした遠方での保存はセキュリティの障壁がない点でアクセス可能であるが、その距離がアクセス不可能たりうる。むしろ、拡散によって多数の保存先ができるかもしれず、一方で部分的な拡散にとどまるかもしれない。再読の可能性は再読の不

可能性とともにある。

六 おわりに

沖繩には「途切れた物語が多すぎ」、その間を埋める研究はこれからの社会学者や、歴史家などによってなされるのかもしれない。事実をいくつ組み合わせても確固たる真実にはならず、むしろ事実どうしの背反さえ生じる可能性もある。過去のことさえ不確かならば事実性を根拠に再現することはできない。ただ未名子にとって「自分ができるのは、事実を記録したものをアーカイブし、保存することだけ」である。むしろ、未名子が真実を探る気がないとしても、その行動によってゆるやかに事実・対象に向かう物語がたちあがるだろう。

そして、災厄によって元の状態がわからなくなったとき、全てがなくなつたときに「この情報がみんなの指針」になり「だれかの困難を救う」かもしれない。しかし、危機が到来しなければ、情報は「ずっと役に立たずに、世界の果てのいくつかの場所ですっとしたまま、古びて劣化し、消え去ってしまうこと」のほうが、きつとずつとすばらしいことに決まっている」と考える。むしろ、更新しないまでも事実につつまれる情報を維持する作業も不可欠のほうであり、誰かが情報を検証・考証することも必要なほうである。こうした、事実を大切にする未名子の行動は、事実を歪曲し、忌避し、隠蔽するとは真逆の姿勢であり、事実に関わり事実を生から排除することができないこと

を確かなものとする態度である。『首里の馬』は、そうした態度を肯定するフィクション、すなわち、事実と共に現実に向かうフィクションなのである。

最新作『暗闇にレンズ』（東京創元社二〇二〇・九）は、現代のスマホで撮影した動画を公開する女子高校生「私」と彼女の物語を *sideA* と、映像が力を持つ歴史を嘉納家の人々の歴史をフランスにわたる照、ドイツで記録映画作りに関わる未知江と、ベトナムでの地下活動で死ぬひかりの三代の物語として描く *sideB* が結末で結びつく。 *sideB* は *sideA* の世界観設定であり、映像・記録の危険性を示す。画像・映像は客観的受容したものが具現するのではなく相手に対して働きかける。感動はむろんのこと国威発揚等の効果もある。それは比喩的には武器たりうるが、この物語では実際に直接脳内に作用する殺人武器として形象される。

『首里の馬』では人々の暴力は間接的に他者に対する差別・抑圧、あるいは警官の大声として描かれるのに対し、『暗闇にレンズ』では一尾の直接的な悪意、あるいは軍・警察・秘密の組織の具体的な殺戮・暴行として公然化される。

『首里の馬』では未名子がとる動画は誰かを傷つけるためではなく災厄の際に復元するための善意の記録映像であったが、『暗闇にレンズ』ではそうした映像が編集されると、あるいはそのままでも誰かを害すること、撮影者に悪意がなくとも誰かを傷つける武器になりうる事が描かれる。現在の監視社会、権力のメディア統制の成り立ちを比喩的な物語によって提示すると共に実際に映像兵器として機能する。

すなわち、『暗闇にレンズ』は、『首里の馬』の論点が必ずしも肯定されるわけではなく別の問題を孕むことが開示されているのであり、高山羽根子の軌跡の深まりをみる事ができる。

- (1) 「未知なる生物」をことばで再現する」(『文学界』二〇二〇・九)。
- (2) 「未だ名がない世界」(『新潮』二〇二〇・九)。
- (3) 『沖繩に連なる』(岩波書店二〇一八・一〇)五五頁。
- (4) 「ざわめきが満ちる空間」(『すばる』二〇二〇・九)。
- (5) こうして順・未名子の具体的な現象への記録の欲望は、文字から画像そして動画へと変わる。しかし、それにともないデータ量は飛躍的に増大する。保存のためのドライブ容量の確保は容易ではあるまい。

付記

本稿は高山羽根子・生田美秋両氏と行った高志の国文学館 文学講座(特別講座) 座談会「芥川龍之介賞受賞作『首里の馬』を読む」(二〇二〇・一・二九、富山県教育文化会館)のための準備原稿を活字化したものである。関係各位、職員ならびに聴衆の皆さんに感謝申し上げます。

(本学人間発達科学部 教授)